

情報通信審議会 情報通信技術分科会
技術戦略委員会 共創イノベーションWG（第2回）
議事概要

1. 日時

令和2年2月7日（金） 10時00分～12時00分

2. 場所

総務省第1特別会議室

3. 議題

- (1) 重点領域WGについて
- (2) 共創イノベーションWGの検討状況について
- (3) 意見交換
- (4) その他

4. 出席者

- (1) 構成員（主任等を除き五十音順、敬称略）

森川主任（東京大学）、浅見構成員（国際電気通信基礎技術研究所）、岩科構成員（日本電信電話）、西角構成員（三菱総合研究所）、安井構成員（情報通信研究機構）

- (2) 総務省

（国際戦略局）

二宮官房審議官（国際技術、サイバーセキュリティ担当）、松井 俊弘（技術政策課長）、山口 修治（通信規格課長）、森下 信（宇宙通信政策課長）、高村 信（研究推進室長）

- (3) 事務局

（国際戦略局技術政策課）

山野企画官、中川統括補佐、加藤課長補佐

5. 配付資料

資料2-1	情報通信審議会情報通信技術分科会技術戦略委員会 重点領域WGについて
資料2-2	共創イノベーションWGの検討状況について
資料2-3	テストベッドの取組及び今後の方向性について（安井構成員 提出資料）
資料2-4	本WG検討に係る参考事例のご紹介（西角構成員 提出資料）
参考資料1	共創イノベーションWG（第1回）議事概要
参考資料2	資料2-2 関連資料集
参考資料3	スケジュール
（机上配布）	ラウンドテーブル／ヒアリング先一覧

6. 議事概要

3. の議題について検討を行った。議事概要は以下のとおり。

（1）重点領域WGについて

事務局より、資料2-1に基づき説明がなされた。

（2）共創イノベーションWGの検討状況について

事務局より、資料2-2に基づき説明がなされた。あわせて、安井構成員より資料2-3について説明がなされた。

（3）意見交換

西角構成員より資料2-4について説明がなされた後、上記（2）に関し、意見交換が行われた。主な意見等概要は以下のとおり。

- テストベッドについて映像系の利用者がまだいることがわかった。しかし、総務省の研究テーマから映像系がなくなっている。AI等を絡めて新しいテーマを出せないか。5Gの技術とアプリでのミスマッチがあるため、テストベッドではそういった精度向上の研究を実施してもらいたい。
- 車の自動運転が盛り上がっているが、今はレベル3から4に行こうとしている段階。低遅延で映像伝送が実現できれば、リモート監視により1人の人が多くの車を制御できるようになり、レベル4が実現できるのではないか。
- 日本の大学では教育と研究が明確に分かれており、事務も分かれている。どんなに研究プロジェクトを持ってきても事務側は嬉しくなかったりする。アメリカでは研究者と事務部門の運命共同体のような状況が作られており、受託研究やノウハウの移転も一生懸命やる構造になっている。
- 研究者と支援者、研究者とプロデューサー等という対立構造の視点で整理するのを変えた方が良いのではないか。研究者は論文で勝負するのが基本ではあるが、全員がそうかというところでもないもので、どの人材にどの経費を活用するのかを再定義してもよい。
- プロジェクト設定の段階から、プロデューサー、メンター、あるいは経営者に相当するような世界の人たちと一緒にプロジェクトデザインをしないと、独断でやった場合プロトタイプができたときには手遅れということもあり得る。シーズからのプ

ロトタイプと実際のニーズがマッチしない原因だったりもする。

- 研究者は常に新しいことをやっているが、サービス側やユーザー側は、今あるサービスを維持しなくてはならない。このギャップを埋めるのに苦労したりする。研究人材の配置転換や研究とビジネスの中間人材が必要か。
- 地域課題への取組みなど、課題の現場に研究者が触れてもらうことは重要。地域でやるときに問題になるのは、課題はあるが金と人が足りないこと。地域の研究人材を活用することも重要だが、国研等の研究者が参画することもありうる。
- 研究者が引き抜きにあった場合でも、出て行くことをマイナスと捉えず、いずれ戻ってきて貢献してもらい、外で培った能力がフィードバックされればよい。
- テストベッドについて、研究として使うフェーズと、スタートアップが自分のやりたいことを実証で使うフェーズがある。後者は共同研究契約や発表が必要と言う点がネガティブ要素になる可能性。
- 課題解決型の研究も公募期間を工夫すると面白い研究ができるかもしれない。課題を提案するフェーズと、課題の中にある問題を解決してもらう2つのフェーズに分けてマッチメイクするとそれぞれに責任感が出るかもしれない。
- 他機関でも課題解決型研究をやっているがなかなか難しい。研究者はお金をかければ出来ることを何かしら提案するが、ビジネスや事業のにおいがせず、実際には使われないことが多い。将来的に絶対必要なので一步一步進めていくような分野はよいかもしれないが、情報通信分野で実施する場合には悩ましい。
- 多くのプロジェクトが数年やった後に実装となるが、ファーストユーザーを見つけるのに苦戦する。それができないということは本質的に立て付けから問題があったということ。出口のところでも少なくとも1社や1自治体はファーストユーザーが確実に存在するという想定で、関係者をうまく巻き込んでいるかがうまくいくかどうかの判断のポイント。
- NICTの大部分の研究者は論文で勝負するというマインド。今いる人材のマインドを一気に変えて使いこなすのは限界があるので、内部人材だけではなく、あらゆる手段で人材交流を進めていきたい。また、入り口の採用においても、どのようなスペックの人を揃えてくべきかを考えながらやっていきたい。
- 研究職における人事ローテーションも重要で、研究所の人間も開発部隊の経験が必要。大学教育の中でも、企業への出稽古的なことをやり、事業の考え方のようなもの研究者を目指す人も認識した方がよい。
- キャリアプランの中では、リスクの大小も重要だが、コントロールできるかどうかという観点も重要。リスクを自分の手の内でコントロールできれば、大きいリスクでも人はそちらに進むこともある。任期付雇用という仕組みが上手くいかないのは、リスクがコントロールの範囲外と認識されるからであって、制度の予見性や透明性を高めていく発想も必要。
- 修士課程から博士課程に進学し続けない一因は、大学教員の生活に余裕がなく、指導教員が若い学生にとって魅力的に見えないからであろう。
- SCOPEを博士人材の「未踏事業」みたいにすれば、博士課程に進む人も増えるのではないか。
- 文系の人とSCOPE事業には距離がある。情報通信技術は社会と密接に絡んでいるのでそういった人が手を挙げられるようなテーマもありうるのではないか。

(4) その他

事務局より、第3回は3月以降に開催予定である旨連絡があった。

以上